

漢法苞徳塾資料	No. 219
区分	医学史
タイトル	難經のABC
著者	八木素萌
作成日	1989.11.12 内経学会日曜講座

- ◎難經の成立
- ◎難經にまつわるエピソード
- ◎難經の著者
- ◎難經の評価
- ◎難經の発明
- ◎難經の記述の特長
- ◎難經の主要な注解書
- ◎難經に関する誤解
- ◎難經の主要な論点

◎『難經』の成立

南京中医学院の『難經校釈』に「難經は春秋時代の秦越人（扁鵲）の著である。ただ、史記の扁鵲伝、漢書芸文志には記載がなく、傷寒論の序と、隋書経籍志には難經について記載しているが、著者は明らかにしていない。唐代の楊玄操の難經註と、旧唐書経籍志は秦越人の著としている。種々の文献に記載されていることからすれば、難經は内経の後、傷寒論の前の頃成立し、長い歴史的過程で転々と相伝されるうちに、たえず修改・整理・補充を受けながら次第に成立して来たもの」と記述しているが、穏当な見解であると思う。春秋戦国時代は前 770～前 220 年、史記の成立は前 91 年、秦始皇帝の抗儒焚書は前 212 年、傷寒論の成立は 196 年（東漢末）、甲乙経は 282 年・脈経は 300 年に成立している、齊代は 479～501 年、梁代は 502～557 年である。郭霽春の「中国医史年表」では難經と傷寒論は 30 年の違いであるとしているが、も少しの年代差を見る説が多い様である。史記・扁鵲倉公列伝の記述を赤堀氏は検証して、史記の記述の俣ならば扁鵲は 300～500 年位生きていなければならぬと書いている。難經には後代の衍文や竄入と思われる所が極めて少ないか殆どないし、文体の上からも統一的な調子であるので、一人の著でないとしたら、組織的に強力な、また医学理論の上でも高い水準を持っていた強力なギルドが護り抜いて来たものと考えられる。

◎『難經』にまつわるエピソード

難經古義の序に「難經」は「医経之秘録」であって岐伯から黄帝に授けられ伊尹・文王・医和などを経て秦越人までに 26 師を経て伝えられ、秦越人の手で「章句」が立てられ、更に 9 師を経て華佗に

伝えられたと記述している。一代約 30 年と言われるが、岐伯から秦越人までにほぼ 700～800 年経っている事になり、秦越人が「章句を立て」てから華佗に伝わる迄に約 200 年を経過していることになる。「三国志・魏書・方技伝」によると太祖曹操の召集に応じなかった為に華佗は投獄されて獄死するのであるが、獄吏に「この書は活人の書だから」と言って一卷の書を渡そうとしたが、獄吏は「法」を恐れて受け取らなかった、と記述されている。岡本一抱の「難経本義諺解」の序には、この書とは「難経」で、獄吏は活人の術を得れば結局は華佗の様に殺される羽目になると女房が強く反対したが獄死するのは嫌だからと言って「難経」を受け取らなかった、として紹介している。そして「難経」はこの結果焼かれたので・現在残されているのは・その焼け残りの書であるとの説も紹介している。皇甫謐は「帝王紀」の中で黄帝が扁鵲に「旁通問難八十一」したものが難経だと記述している。「蓋古之義也」と難経古義の著者は言っている。

◎『難経』の著者

唐代の楊玄操が難経註で著者は秦越人としている事は前記の通りである。通説は秦越人と言う事である。

史記の扁鵲倉公列伝の秦越人（扁鵲）の記述を見ると、海の人で、若い頃には客館の長をしていた。長桑君が客としてそこに宿泊したが、扁鵲は珍しい人物と見て、謹んで彼を処遇した。何時も変わることなく丁重にもてなした遣り方から、長桑君も秦越人の人物が並々ならぬものであると見ていたので、十数年客館に出入りした後に、秘かに秦越人を呼んで、私には「禁方」があるが、もう年老いたので貴方に伝えたいが他に泄らさない様にして欲しいと告げた。そして懐中から薬を取り出して扁鵲に与えた。扁鵲はそれを「上池之水」で服んだ、それから三十日すると、それまで見えなかったものが見える様になった。そうすると長桑君は「禁方書」を尽く扁鵲に与えて忽然として姿を消してしまった。とても人間技とは考えられない様子であった。秦越人はその言葉に従って薬を三十日服用したら堀の向う側の人も見えるようになった。病人を診察すると体内の様子が悉く見える様になっていた。長桑君との約束があるので脈を診て全てが判るのだと称したと記述されている。史記正義にはこの部分に註して、秦越人は伝説時代の名医の扁鵲にも等しい程であるから扁鵲と呼ばれる様になった、また盧の国に住んでいたので盧扁とも呼ばれた、と述べている。然し難経の真の著者は誰であるかは判からないままである。

◎『難経』の評価

極めて重要な鍼医学の書であると言う評価には変りはないが、内経との関係では評価は両極端である。難経を全く無視すべきものとする向きもあるようだが、このような極論は別としても、熱心に研究するほどの書ではないかの様に考える人は少なくないようである。それは間違いであると思う、熟読玩味する事によって、難経が「活人の書」と称されてきた理由が肯づけるものである。

『古本難経闡註』（丁錦・著）の自序に「其ノ辞ハ靈素ニ出ズトイエドモ晦キモノハ之ヲ明カシ、繁ナル者ハ之ヲ省キ、缺ケタル者ハ補ナヒ 複セル者ハ之ヲ略シテ 微シモ徹セザル無ク 義ニハ訣セザ

ル無シ」「数千年来、尚ホ人ノ靈素ニ義ヲ知ル者有ルハ 独り此ノ書ノ存スルニ頼レリ〜」とあり、同書の張基の序文中に「難經ニ晦クシテ靈素ハ彰ラカナラズ 靈素ニ彰ラカナラズシテ医道或イハナソカ息マンヤ〜」と記述している。『難經本義諺解』の「発端の弁」に「素問靈樞ノ要語ヲ採イテ、此ヲ越人自問答ノ辞ヲ設テ内經ノ奥旨ヲ發明ス、難經ハ本内經ニ從テ設タル問答也、故ニ難字去声トシテ問難ニ視則秦越人が其門人弟子ト医道ノ事ムツカシキ難、義ノ問ヲ致シ、答ヲ致シテ此八十一篇ニ述ニ書トス」「其最深理ヲ存シテ医家ノ神要、素靈ノ奥旨、後学ノ所難曉要語ヲ採テ自問答ノ辞ヲ設テ其理ヲ八十一篇ノ間ニ發明シ後学ヲシテ医道ノ源ヲ曉易カラシム、故ニ題シテ難經ト号、難ハ内經難曉要語ヲ發明スレバ也、經ハ内經及ビ古經ノ要語ヲ採バ也」とある。